# 2024（令和 6）年度
# 相模原看護専門学校
# 公募推薦・社会人入学試験

# 国語

**（試験時間 50 分　配点 100 点）**

**注意事項**

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 解答する途中で、ページの落丁・乱丁や印刷不鮮明の箇所および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて試験官に知らせてください。
3. HB の黒鉛筆を使用し、訂正する場合は消しゴムで完全に消してからマークしてください。
4. 氏名を記入し、番号欄を正しくマークしてください。
5. 試験終了の合図と同時に解答を止め、鉛筆を置いてください。
6. 解答用紙は試験官の指示に従って提出してください。

**問題一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。**

1 人間はどうしたら創造的に生きられるのか、生き続けられるのか。私は自分に向って、こういう問いかけを、長年にわたって繰返してきた。この問いかけが始まったのは高校生のころからだったが、それに対して何ほどかの自信をもって答えられるようになったのは、自分の能力や仕事に対する客観的な評価が、ある程度できるようになってからである。それより、さらに後になると、創造的に生きるということを、自分だけでなく、他の人々にも共通する問題として考えるようになってきた。

しかし、今になってふりかえってみると、もっと前から、私の心の奥で、もう少しちがった形での 2 自問自答がなされていたように思われる。それは中学生のころまでさかのぼれる。最初の問いかけは「自分はいったい何者であるか。自分はいったい何をして生きてゆくべきか」というような形であった。それから今日までの間に、五十年の歳月が経過した。五十年前の私と今の私の間には、多くの点で、ひじょうに大きな隔たりがある。しかし、創造的に生き続けたい、そしてそのために、自分が何者であるか、自分の中にどのような可能性が a ヒソんでいるか、何をして生きてゆくべきかを問い続けている、という点において、3 不変なるものの持続が確認できるのである。

別の言葉でいうなら、自己を発見することから始まって、次にはまた、もっと違った自己を発見する、さらに後になってまた新しい自己を発見する。そういう発見ないし再発見を繰返すことが、前進でもあり、それが創造的に生き続けることを可能にしている。そういってもよいであろう。

私にとっての最初の明確な自己発見は、自分が孤独な人間だと強く感じたこと、そのことであった。それは中学の一年生の時のことである。

夏休みに学校から、三週間ほど海水浴に行った。百人たらずの生徒が、先生に b 引ソツされて、三重県の津市まで汽車に乗って行った。その中に私もまじっていた。市中の大きな寺の c 本ドウに合宿して、毎日海岸まで歩いてゆくことになっていた。

着いた日の午後、「君たちの中の仲よし同士が、二人ずつ組をこしらえておきなさい」と、先生からいわれた。というのは、夜になると、蚊がでるので、かやをつる。その中には、敷きぶとんを二枚か三枚ならべてあり、一枚に二人ずつ寝ることになっていた。当時は男女共学ではなかったから男の子ばかりである。それで、夕方までに自分のパートナーを見つけておけ、というわけである。

友だちはみな、どんどん相手をきめていっているらしいのに、私だけは誰にもいいだしそびれていた。また、誰も私に声をかけてこない。そうこうするうちに、夕方になってしまった。不幸にして生徒の数は奇数だった。ふとんを敷きだしたが、私の行き場はない。その時の何ともいえない悲しい気持が、今日まで消えずに、私の心の奥に残っている。

先生は、はんぱになった私のために、一人だけの幅の狭いふとんをもってこさせて、他の二組の生徒と一緒のかやの中へおさめてくれた。

この小さな出来事が、あとになって考えてみると、その後の私の考え方、生き方に、相当な影響を及ぼし続けているように思われる。

父母、姉二人、兄二人、弟二人のほかに、祖父が一人、祖母が二人もいる、大家族の中で育った。家も広かった。そういう私にとっては、家と庭とが、ほとんど自己完結的な小世界であった。それでも小学校時代には、友だちともよく遊んだ。それが先ほどの出来事があって以後は、学校から帰ると、家から外へでないで、いろいろな本を読むことで、おおかたの時間をすごしてしまうようになった。

4 もともとあった内向的な傾向が、急速に強くなっていった。自分とうまくつながらない外の世界、その中で孤独になった自分にいったい何ができるのか。この世の中でいったい何をして生きていったらよいのか。そんなことをだんだんと深く考えるようになっていった。小説なども、いろいろ読んでみた。文学の世界には確かに魅力があった。しかし、そこにも大人の世界のさまざまなわずらわしさが入りこんでいる。童話の世界のほうが、その点ではもっとよかった。

ちょうどそのころ、童話・童謡の雑誌「赤い鳥」が出だしたりしていた。それで一時は、童話作家になれたらいいだろうなどと思った。そうは思ってみても、そのころの私にとっては作文が大変な苦手であったから、作家になるなどとは、自分の適性に反した夢にすぎないと思いかえさざるを得なかった。

この夢が 5 あえなく消えた後、私の関心は文学書よりも 6 哲学的な書物のほうに移っていった。それは中学の後半から高校の前半の三、四年間のことであった。しかし、文学少年が哲学青年になるのは、別に珍しいことではない。ここまできても、私はまだ自分が何者であるか、何者になりうるかについて、自信のある判断ができずにいた。ただ自分は結局、学者になるしかない、それも世間との交渉のできるだけ少ないような学問の分野に入ってゆくしかない、とは思い続けていた。

ところが、高校時代の後半になってから、私の興味は急に物理学にしぼられだした。それはひとつには当時、科学の先進地域であったヨーロッパで、物理学が激動の時代を迎えつつあることを知ったからであった。そこには、未知の世界が大きく開かれていた。数年後に自分が研究者として、この世界に入っていったら、何かができるのではないか。自分の適性もそれに向いているという、多少の自信もできつつあった。それよりも何よりも、物理学を研究するのは大いにロマンチックなことだ、と思ったのである。この気持は今もなお変らない。

この自己発見は、私からいろいろな迷いを追いはらってしまった。大学へ入ってからの私の気持は安定していた。孤独な人間であるという気持自身が、自分の選んだ道を一人で歩くのだという 7 青年期の気負いに変りつつあった。ただし、まだ何事をも成就していなかった私には、「ついに無才無能にして、8 この一筋につながる」という芭蕉の言葉が、絶えず励ましとなっていたのである。

物理学の研究をロマンチックだと思い続けることは、私にとって創造的に生き続けることでもあるはずだった。しかし、毎日繰返される研究生活の中で、創造への飛躍といえるような出来事は、滅多に訪れなかった。

9 今日(きょう)もまた空しかりしと橋の上に
　　きて立ちどまり落つる日を見る

何日たっても何ヵ月たっても、ちっとも先へ進めない。今まで、これこそ自分の見つけた新しい真理だと思いこんできたことに対しても、疑惑が頭をもたげたりする。そういうことを繰返し経験しながら、ある一つの考えに執着し続ける。いったい何のためか。そこには確かに、ある期間内に何か業績をあげなければならない、というあせりもあった。特定もしくは不特定の相手との競争意識もあった。しかし、それらは一人の人を長期にわたって、10 この一筋につなげる原動力とはなりえなかった。

私の中にあって、何十年にもわたって、私を動かし続けているのは、未知の世界へのあこがれである。私にとって、それは美しい世界であると期待されている。物理学者でない人たちにとっては、それは別に美しいとは思えぬ世界であるかも知れない。そしてまた、他の多くの物理学者にとっては、美しいかどうかなど、どうでもよいことかも知れない。真実でありさえすればよいのかも知れない。実験と一致しさえすればよいのかも知れない。

そもそも何が美しいのか。科学の世界においては、はっきりしたきめ手はない。比較的少数の単純な、そして普[d]ヘン性をもつ法則によって規定される世界、という以上の的確な表現はないかも知れない。しかし、そんなら、科学以外の世界では、美の定義ははっきりしているのか。どうもそうではないらしい。芸術の場合において決定的なことは、それぞれのジャンルにおける、美に対する感受性があるかないかである。科学のいろいろな分野の中でも、理論物理学や数学などでは、やはり一種の美的感受性が無視できないのではないか。

もちろん数学の場合には、論理的整合性という条件が満たされていなければ、話にならない。さらに理論物理学ともなれば、事実の世界との一致ないし密接な対応が決定的な条件になる。それらは、どちらも実に厳しい条件である。むしろ、そういう厳しい条件を満たそうとする人間の持続的な努力の結果として、たまさかに創りだされるものであるが故にこそ、新鮮な、そして鋭い美しさがそこに見出されるのであろう。

それはたとえば、童話の世界のような「[e]カン美」と形容される美しさとは、確かに異質的な性格をもっているように見える。しかし童話の作家が傑作を生みだすには、やはり天分だけでなく、大きな努力も必要であろう。それに何よりも、童心がないといけないであろう。童心という中には、みずみずしい好奇心や空想力が含まれている。それらは科学者には不必要なものだと思われているかも知れない。有害であるとさえ思われているかも知れない。しかし私は、そういうことにかかわらず、いつまでも童心を失わずにいたい、と思っている。

そして近ごろは、物理学の研究をロマンチックだといつまでも思い続けていること自体が、童心のなせるわざであるとさえ思えてくるのである。それは中学生のころ、気まぐれにもせよ、童話作家になりたいと思ったことと無関係でないのではないか。こんな奇妙な想念が、このごろしきりに頭に浮ぶのである。

（湯川　秀樹『科学を生きる』より）

**問一**　傍線a～eのカタカナと同じ漢字を使うカタカナを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選び、記号をマークしなさい。解答番号はa＝ 1 ・b＝ 2 ・c＝ 3 ・d＝ 4 ・e＝ 5 。

a　**ヒ**ソんで　1

① 守**ヒ**義務。
② 道路陥**ボツ**。
③ **セン**伏期間。
④ 領土**シン**犯。

b　引**ソツ**　2

① **ソツ**直に言う。
② **ソツ**中で倒れる。
③ **ソツ**溝があふれる。
④ 薬の**ソツ**効性。

c　本**ドウ**　3

① **ドウ**体視力がよい。
② 言語**ドウ**断の行い。
③ 一視**ドウ**仁に接する。
④ **ドウ**に入った演技。

d　普**ヘン**性　4

① 時代が**ヘン**遷する。
② **ヘン**見をなくす。
③ 寺社を**ヘン**歴する。
④ **ヘン**境に赴く。

e　**カン**美　5

① **カン**静な住宅街。
② 非難を**カン**受する。
③ **カン**銘を受ける。
④ 果実が**カン**熟する。

**問二**　傍線１「人間はどうしたら創造的に生きられるのか、生き続けられるのか」について、筆者は本文全体でいくつかの考えを示しているが、その考えに合わないものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は $\boxed{6}$ 。

① 物理学の研究をロマンチックだと思い続けること。
② 未知の世界へのあこがれをもち続けること。
③ 新しい自己発見を繰り返すこと。
④ 論理的整合性という条件に向けて努力すること。

**問三**　傍線２「自問自答」は「自」を二度くり返すが、そうではない四字熟語を一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は $\boxed{7}$ 。

① □由□放　② □暴□棄　③ □画□賛　④ □縄□縛

**問四**　傍線３「不変なるものの持続」について、筆者は文中でいくつか述べているが、それに適合しないものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は $\boxed{8}$ 。

① 創造的に生き続けたいと思うこと。
② 何をして生きてゆくべきかを問うこと。
③ 自分が何者であるのかを考えること。
④ 自分と他者との相違による自己を発見すること。

**問五** 傍線４「もともとあった内向的な傾向が、急速に強くなっていった」のはなぜか。その理由として最も適切なものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 9 。

① 家と庭とがほとんど自己完結的な小世界だったから。
② 大家族の中で育ったため外の世界とうまくつながりをもてなかったから。
③ 学校から帰ると家から外へでないで本を読んで時間をすごしていたから。
④ 中学の合宿で自分だけがパートナーを見つけられなかったから。

**問六** 傍線５「あえなく」の意味に合致するものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 10 。

① やるせなく　② あっけなく　③ やむなく　④ ことごとく

**問七** 傍線６「哲学」とは全く異なる学問的分野を一つ選び、記号で答えなさい。解答番号は 11 。

① 宗教学　② 人文科学　③ 倫理学　④ 自然科学

**問八** 傍線７「青年期の気負い」の意味に相当する故事成語を次の中から一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 12 。

① 鼎の軽重を問う　② 青雲の志　③ 出藍の誉　④ 故郷へ錦を飾る

**問九** 傍線８「この一筋」に相当するものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 13 。

① 俳諧　② 連歌　③ 国学　④ 和歌

**問十** 傍線９「今日もまた空しかりしと橋の上に　きて立ちどまり落つる日を見る」という歌は何を表現しているか。最も適切なものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 14 。

① 日々、橋の向こう側の新しい世界に渡ろうとしているが、実現できていないこと。
② 新しい真実をはるか遠い落日に見立てて、それが手に届かない空しい気持ち。
③ 日々の研究生活が地味に繰返されるだけで、なかなか成果をあげられないこと。
④ 今日も業績をあげられず、不特定の相手との競争に敗れてしまった敗北感。

**問十一** 傍線10「この一筋」に相当するものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 15 。

① 物理学　② 創造　③ 競争　④ 美しい世界

**問題二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。**

そもそも[1]句会というのは、元来ごく普通のコミュニケーション手段であった。そう、かつて茶会や歌合せがそうであったように。

ちなみに我が国において文芸が、[2]作家による一方通行的なマニフェストとして発達せず、複数の連衆によるコミュニケーションの媒体として発達したことは、研究に値するテーマである。[a]ヒ肉に言えば我が国の近代は、そのようにして発達した芸術が、西欧的な「芸術家対大衆」というかたちに組み込まれて、大袈裟に言えば解体してゆく過程であったと捉えることもできよう。

コミュニケーションとしての句会は、おそらく本書を読んでいただいた方には理解していただけるのではないか。

出席者は他人の句に対して褒(ほ)めたりけなしたりしているが、決して白か黒かという具合に論難しているわけではなく、そうすることで自分と言葉の関係のあり方を確かめ、あるいは出席者に表明しているのである。そしてそうすることで、自分と他人の立場の違い、ひいては距離を計るのだ。

わたしは現代俳句が半ば意識的にこのコミュニケーションとしての句会、つまり全員が同じ立場に立って俳句を流通させる句会、をおろそかにしたことは、一種[b]痛コン事だと思っている。

無論、そこには無理のない点もある。

そのもっとも大きな理由は、日本という国が近代というパラダイムにとりこまれたことによるだろうが、こう記すと問題が一種茫漠(ぼうばく)とし過ぎる[3]嫌いがあるので、ここでは[c]便ギ上、俳句の活字化と表現させていただこう。

この俳句の活字化にともなう結社誌の普及で、句会から俳句のおひろめの場としての機能が奪われてしまった。

それと同時に俳句も変質した。

俳句はそもそも書き文字、それも心をこめた書き文字で、手から手へとわたされた文芸だった。（これについては洋の東西を問わず、黄金期の[4]韻文はすべてそうだったと言えるかもしれない。）

そうした俳句は、特定された読者に対する限りない信頼感を軸に成り立っていた。要するに「ここまで踏み込んで書いても、彼らなら読む筈だ」という安心感である。

これに対して活字化された俳句は、明らかに違う風合いをもっていた。すなわちそれは初めから不特定多数の、読み手としてはまことに見えにくい読者に提供された。そのため見映えがよく堂々としてはいるものの、どこか肩肘を張り、いわば読者を信頼しない風があった。

無論、活字期に入った瞬間から俳句がそのように変貌したというのではない。当初はそれでもある特定の選者を読み手として措定したりして、本来の信頼感を保ち続けようとした。しかしそれも、特定の選者という[5]神話、もっとはっきり言えば虚子神話が崩壊するとともに失われた。

御存じの方も多かろうが、明治から昭和にかけての俳句シーンの常に中心にいたのは、かの高浜虚子である。この時代に生まれた名句の多くは彼を読者として仰ぎみることで成立した。（そしてある種の俳句は、彼を仰ぎみないことで生まれた。このふたつの態度はカードの裏表である。）

今、多くの俳句は確かに字面（じづら）の格好はよくなっている。俳句総合誌を一瞥すれば実に堂々たる構えの俳句が並んでいるのが分かろう。しかしそれらがいったい誰に向けて書かれたのか不明である。無表情なのだ。現在においてもっとも個性的な風貌を有する俳句でも、それが読者に徹底的に読みこまれることを意図して作られた形跡はない。

それはよしあしの問題ではない。

活字がなければ俳句はかくまで広まらなかっただろうし、活字化自体は俳句のみならずすべての文芸が負わねばならない宿命だったから。

しかし活字の登場によって句会が俳句のメインステージからすべりおちたことだけは事実である。

その結果、[6]句会は実に退屈なものとなった。句会は俳句を媒介としたコミュニケーションの場というよりは、俳句の品定めの場となり、活字発表のための前座とみなされるようになった。

要するに遊びの要素が一切失われたのだ。

俳句は [A] 触りよりも見た [B] が重んじられるようになり、どれだけ読みこめるかということよりも、どれだけそれらしく書かれているかということが評価されるようになった。

[C] ある俳人は句会に出席しなくなり、句会はその [D] 隙を埋めるように[d]サイ限なく権威主義、点数主義へと走った。

わたしは様々な句会を見てきたが、現在における句会のほとんどは、句座をともにする者のコミュニケーションが存在しないと断言する。（ただし、句会が終わった後、酒など飲みながらの二次会などでは、結構句会での句が酒のさかなになったりするケースもあるようだが。）

では具体的に句会とは何を目指すべきなのか？

言うまでもなく、コミュニケーションはある種の結果であって、目的ではない。

わたしの答えは簡単である。

遊びであるべきなのだ。それも大人の。

大人のという意味は、相手（＝俳句）も十全に理解した上で、自分（＝俳句）を主張でき、主張を戦わすこともできれば、あっさりシャッポを脱ぐこともできる。また、相手の誠実さを認めているから、安心して自分の思考を深めることができ、また相手が自分を知悉（ちしつ）していることを知っているから、時々シャレっ気を出して思わぬ自分を見せてやろうと手ぐすねをひく。そして何よりも大事なのは、そうは言いつつも自分で自分の責任をとる能力があり、いざとなれば全力で最高のものを作るべく努力できるといったところだ。

なんだか当然のことをトクトクと書いているようで我ながら気恥しいが、こうした句会が現在壊滅状態にあることも事実なのだから仕方がない。

こうした句会をどのようにすれば復活できるかというのは、実は大変難しい問題である。ひとつには、俳句を通してコミュニケーションをするというのは、口で言うほど簡単なことでないからである。それには出席者全員がある最低限の共通の教養を所持しなくてはならないだろうし、言語に対してそれなりの[7]矜持（きょうじ）を有する必要がある。更には固定化しないために韻文を制作する上での向上心も[e]不可ケツだろうし、古今の俳句に対するある程度の知識も必要だろう。

こうしてずらずらと記すと、その煩雑さに辟易して、そんなことで遊びになるのかと反問する人もいるかもしれない。

わたしはそれをあっさりと認める。

そもそもこんなにバーを高くしてしまっては、書いているわたしだって出席する自信がない。

にもかかわらず、わたしは遊びとは本来そうあるべきなのだと思う。「遊びだからいいや」では、次の回からそれは単なるお

遊びに堕するだろう。

8 自分の無知、未熟を知りながら、なおかつ現時点でのベストをつくすからこそ、遊びは成立する。あとは個々が句会という遊びの空間をどのように活用するかにかかっているのである。

（小林　恭二「俳句という遊び」より）

**問一**　傍線a～eのカタカナと同じ漢字を使うカタカナを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選び、記号をマークしなさい。解答番号はa＝16・b＝17・c＝18・d＝19・e＝20。

a　**ヒ**肉　16

① **ヒ**膚科に通う。
② 条約を**ヒ**准する。
③ 責任を回**ヒ**する。
④ 堆**ヒ**を撤く。

b　痛**コン**　17

① 動物の**コン**跡を見つける。
② 未来に禍**コン**を残す。
③ 農地を開**コン**する。
④ 遺**コン**を残す。

c　便**ギ**　18

① 遊**ギ**場に行く。
② 異**ギ**を唱える。
③ 適**ギ**に過ごす。
④ 威**ギ**を正す。

d　**サイ**限　19

① 条例案が**サイ**択される。
② **サイ**務を返済する。
③ **サイ**時記で季語を調べる
④ 機械を実**サイ**に動かす。

e　不可**ケツ**　20

① 試合を**ケツ**場する。
② 交渉が**ケツ**裂する。
③ 努力が**ケツ**実する。
④ 墓**ケツ**を掘る。

**問二** 傍線1「句会というのは、元来ごく普通のコミュニケーション手段であった」とはどういうことか。筆者の考えに当てはまらないものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 21 。

① 他人の句を批評することで、自分と言葉の関係を表明すること。
② 句のよしあしを明快にして、それを出席者と共有すること。
③ 出席者全員が同じ立場に立って、俳句を媒体として交流すること。
④ 自分と他人の立場の違いを知り、距離を測ること。

**問三** 傍線2「作家による一方通行的なマニフェスト」とはどういうことか。説明としてふさわしいものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 22 。

① 西欧的な「芸術家対大衆」というかたち。
② 複数の連衆によるコミュニケーションの媒体。
③ コミュニケーションとしての句会。
④ 「芸術家対大衆」が解体してゆく過程。

**問四** 傍線3「嫌い」の意味としてふさわしいものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 23 。

① 極論　② 憎悪　③ 欠陥　④ 傾向

**問五** 傍線4「韻文」の反対語を一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 24 。

① 散文　② 美文　③ 名文　④ 駄文

**問六** 傍線５「神話」の意味に最も近いものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 25 。

① 幻想　② 重鎮　③ 権威　④ 聖人

**問七** 傍線６「句会は実に退屈なものとなった」原因を筆者はどのように考えているか。その説明として最もふさわしいものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 26 。

① 特定された読者に対する信頼感が、仲間内の安心感を醸成していったから。
② 日本が近代というパラダイムにとりこまれたことで、句会の解体が始まったから。
③ 俳句が活字化されて結社誌が普及すると、俳句をおひろめする場としての機能が奪われたから。
④ 明治から昭和にかけての俳句シーンは、高浜虚子を読者として仰ぎみることで成立していたから。

**問八** A ・ B ・ C ・ D に入る語をそれぞれ一つずつ選び、記号をマークしなさい。解答番号はA＝ 27 ・B＝ 28 ・C＝ 29 ・D＝ 30 。

① 目　② 心　③ 空　④ 手

**問九** 傍線７「矜持」に相当する外来語を一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 31 。

① センス　② プライド　③ モラル　④ ポリシー

**問十**　傍線８「自分の無知、未熟を知りながら、なおかつ現時点でのベストをつくすからこそ、遊びは成立する」について、本文全体の中で筆者が述べている遊びの要素として当てはまらないものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 32 。

① 競い合い　② 自己責任　③ 真剣な努力　④ 協調性

《以下余白》